

論文

# 清水幾太郎における人間の日常性と非合理性への関心

—「市民社会」から『民主主義の哲学』へ—

庄 司 武 史\*

## はじめに

大きな振れ幅を示したその思想的変転のため、現在ではあまりそういう評価はきかれないが、とくに戦前から戦後のある時期まで、清水幾太郎（1907-88）は日本における代表的な民主主義論者のひとりとみられていた<sup>(1)</sup>。

ただし、ひとくちに民主主義といっても、それが意味するところの内容は思想的立場や政治的傾向によって異なる。清水を指した「民主主義論者」という言葉の実質も同様であった。

本稿では、清水が民主主義に関連して著した戦前の論考「市民社会」（1940年）と、戦後間もなくの著作『民主主義の哲学』（1946年）とを中心的に取り上げる。ここで議論したいのは、制度としての民主主義についてではなく、清水における民主主義を支える人間観の形成、特徴、変化である。具体的には、こうした人間観の形成などに影響を与えた、清水の思想における「日常の人間生活と日々の諸問題の解決への視線」および「人間の非合理性の肯定」という側面の形成過程と特徴とを考察する。

なお、いうまでもなく、この論考と著作との間には、1945年の敗戦という大きな転換点が存

在する。したがって、両者の間の変化にその根拠を想像することは容易であるが、今回の議論では、この事実は大きな意味を持たない。本稿では、清水における人間観の変化はすでに戦前においてみられ、戦後に向けた道すじがひらかれていたということを示すことになる。

ところで、清水はジョン・デューイおよびプラグマティズムの思想の影響のもと、その思想の中心に「人間」と「現代」というものを据えていたのではないかというのが、筆者が以前、示した仮説であった〔庄司 2010〕。本稿では、このうち清水の思想の「人間」の部分を検討するが、ここでもデューイおよびプラグマティズムの影響を考慮しなければならない。なぜなら、これも前掲の拙稿で触れたとおり、清水の思想的生涯を検討する上で両者の影響は決して小さくないと考えられることがあるが、それに加え、「市民社会」から『民主主義の哲学』に至る間の変化において、デューイおよびプラグマティズムの受容は、その重要な契機を為すためである。そして、そうして形成されていった清水の人間観は、その後の思想的生涯において、一貫して保持されていくものとみられる。この観点からすれば、デューイおよびプラグマ

\* 早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程2年（指導教員 古賀勝次郎）

ティズムの影響を考慮に入れることは、本稿での議論において重要な意味を持つものと思われる。

## 1. 従来の接近方法とその課題

従来の清水研究において、この問題がどのように捉えられてきたのかを整理しておこう。

まず従来の清水研究における清水の人間観は、「清水は庶民の思想家である」に類する清水像との関連で捉えられがちであったことに注意が必要である。これは清水の思想家像および人間観を語る際に、しばしば用いられてきた表現であるが、それが意味するところでは、大きく2つの系譜があると思われる。

第1に、それを清水の出自や育ちに求める系譜である。清水自身が庶民であるからこそ、日常の人間生活や非合理性に共感的な人間観を持っているという論理の系譜に属する清水論は、とくに1950年前後にさかんに現れた。たとえば、服部之総や南博らの清水論がそれである。服部は、「清水が半生を賭してそこからの脱出をはかりつつ、いまもって脱出できないでいる世界が『庶民』である」と位置付ける一方、その庶民への「かぎりない彼の郷愁」こそ、清水の魅力の源泉ではないかと述べる〔服部 1950: 135-136〕。また、南も清水を、「学者であり、評論家である以前に、何よりもまず庶民、市民の一人である」と位置付ける〔南 1951=1954: 5〕。この1950年前後とは、清水が「匿名の思想」（1948年）や「庶民」（1950年）を書き、『私の読書と人生』（1949年）で自身を「下町の子」と書きつけた時期にあたる。清水を庶民に共感的な思想家と位置付ける論考が多かったのは、時期的に当然ともいえるが、そ

の後もこの系譜は連綿と続いて最近の小熊英二の清水論〔小熊 2003〕にまで至る<sup>(2)</sup>のであり、いわば古典的な系譜ともいえる。

それに対して、清水の出自や育ちも重要な要素であるにせよ、本質的には清水が自らを意図的に「庶民の思想家」と位置付け、その立場から日常的・非合理的な人間観を示したとみる見方がある。これについては、最近の大久保孝治の検討〔大久保 2007〕に顕著な成果をみることができるが、1960年代に清水をしばしば論じた安田武にその萌芽をみることも可能であるので〔安田 1964, 1965=1969〕、これを第2の系譜ということは可能であろう。

ただ、いずれの系譜においても共通して指摘しなければならない疑義として、清水が共感を示した対象が、なぜ「庶民」でなければならなかったのが挙げられる。第1の系譜の場合、庶民出身の者はすべて庶民に共感を持つはずになってしまう危険を回避できず、第2の系譜の場合、清水が庶民に近い場所に自らを位置付けた由来が明確ではない。

上記2つの系譜とは別に重要な視座を提供しているのが、鶴見俊輔、秋元律郎および篠原敏昭である。鶴見の古典ともいえる業績〔鶴見 1960〕は、戦前・戦中期における清水の思想をプラグマティズムの観点から分析を試みた、ほとんど唯一の例とみられ、本稿での問題意識に関連して重要な示唆を受けている。ただ、時間的範囲が戦前・戦中期に限られていること、また清水自身のプラグマティズム理解の検討が十分ではないことといった若干の課題が残る。秋元は戦前の市民社会論を日本社会学史の一角に位置付け、そこにおいて清水の市民社会論が現実科学への志向のうちにやがて文化形態論

へ向かった過程などを詳細に検討した〔秋元 1979〕。また、篠原は戦後の清水の市民社会観の変遷について重要な検討を行っているが、鶴見とは逆に議論が戦後に限られているため、戦前・戦中期との連続性の視点を欠いている〔篠原 2004〕。

以上に代表される先行研究を踏まえた上で、以下ではデューイおよびプラグマティズムの影響に注目しつつ、なぜ清水は日常の人間生活や非合理性に共感的な人間観を持っていたのか、そしてそれは戦後の民主主義論者としての清水にどうつながっていったのかといった問題について検討する。

## 2. 「市民社会」をめぐる人間観

デューイおよびプラグマティズム受容以前の1930年頃の清水の関心は、「市民」の問題を考える「市民社会」にあった。戦前における清水の人間観も、先ず「市民」というかたちをとって現れることになる。この背景には、後で確認するように、社会と個人との矛盾を社会学の根本的な問題意識と捉え、しかも両者を対立関係として捉えるというところに、この頃の清水の社会・個人観の主要な課題があったことがある。

そして、当時、マルクス主義への同伴者を多く含む「唯物論研究会」に加わっていた清水にとって、それはマルクス主義との関係において捉えられ、論じられることとなった。このことは、秋元が指摘したように、「当時の日本の社会科学にあって、市民社会の概念やその分析の視角が、もっぱらマルクス主義理論のうちに約束され、収斂されていた」〔秋元 1979: 174〕という背景と無関係ではない。後に清水は、自ら

の「市民社会」の内容を次のように整理しているが、ここにマルクス主義の影響をうかがうことは容易であろう。少々長くなるが、重要な箇所なので引用する。

「この語の最も普通の使用方法からすれば、前に見た如き絶対主義国家への対立に於いて且つそれからの解放を通じて自己を確立した近代の社会を指すべきである。ルネサンス以後の国民生活にとって実質的側面を形作っているものがその形式的側面に自己を対立せしめ、その統制からの脱却を企て、自己の内部に基づく自然的自発的な秩序に信頼して独立のコスモスとして現れた時、これが市民社会と名づくべきものであったと考えられる。市民社会とは国家との対立に於ける人間共同生活の形式をその近代的段階に於いて見たものにほかならぬ」〔清水 1940=著作集3: 348〕

先ず、ここでいう「社会」とは「国家」を指している点に注意しなければならない。また、清水が対立の要素と位置付けている「実質的側面」については、この前段で、「国民生活に於ける実質的側面即ちその経済生活」〔*Ibid.*: 343〕と規定している。つまり、経済活動をめぐる国家と個人との対立において成立しているのが、清水のいう「市民社会」なのである。こうした「市民社会」観は、現在の目からみるとかなり奇異なものに映るが、小熊英二も指摘しているように、戦前・戦中の言説状況における「市民社会」とは、専ら「資本主義社会」としてマルクス主義が批判するところのものであった〔小熊 2002: 71, 244〕。1930年代の初頭、マルクス主義に接近していた清水もまた、その影響下で経済学的視点から社会と個人とを対立的に位置付ける「市民社会」観を有していた点に注意しておく必要がある<sup>(3)</sup>。

しかしながら、こうした視点が、清水の「市

民社会」観にある種の制約を課したことはたしかである。なぜなら、社会と個人とが常に対立するものとして捉えられる以上、共存するという選択肢はあり得ず、したがって両者の対立は、基本的に解消される見込みが期待される性格の問題ではなかったからである。社会学がそうした「市民社会」を問題のフィールドとして設定する限り、社会学は「市民社会」に対して何らの寄与もできない。清水が「社会学の悲劇」[清水 1934a: 70]と呼んだ事態は、当時のこうした清水の認識を表したものであった。

ここで併せて注目したいのは、清水が1933年に書いた「現代の危機と理論の実践性」という論考である。日本社会学会が同年12月に発行した機関誌『年報社会学』（現在とは誌名が異なる）に寄せたもので、「理論と実践の問題」という特集が組まれている。次第に軍事色が濃くなっていく情勢下において、社会学の理論が政治的实践の方向を指向すべきか否かが焦点となっている。この特集には、尾高朝雄、尾高邦雄、小松堅太郎、新明正道らも論考を寄せているが、総じて社会および社会を構成する個人が抽象的な水準で捉えられ、議論されているのに対し、清水の場合、「現下の危機は市民的社会の危機である」[清水 1933b=1947: 3]という書き出しからうかがえるように、比較的、議論の対象を明確にした上での議論となっている。

この論考で、清水はすでに人間の非合理性に目を向けるべきであることを示唆している。その際、清水によって批判されているのは、合理的な経済活動を行うことが前提とされる「市民的個人」である。現代における社会学理論の実践性の問題に向き合った清水は、しかし、「自己の利益を目指して自己の計算に於いて行動す

る」[*Ibid.*: 20]人間として規定される「市民的個人」では、実践の主体として耐え得ないことを指摘する。たとえば次に引いた箇所においては、合理的な人間をどこに見出すことができるのかと疑問を呈した上で、むしろ「統一を失い力を失った人間」として規定すべきことが示唆されるのである。

「真理の基準を自己の中に求め、一切の世界を構成するものとして自らを示し得る人間を見出すことが出来るであろうか。現代はそのような統一と力とに於ける人間ではなくして、却って統一を失い力を失った人間を持っているのではないか」[*Ibid.*: 18]

にもかかわらず、清水はそうした「市民的個人」に代わり得る人間像を明確に提示することができなかった。そのため、ここで清水は、社会学理論の実践を担う人間を「市民的個人を超えたものとして新しく建設されるのでなければならぬ」[*Ibid.*: 20]と抽象的に規定せざるを得ないのである。また、非合理的な人間であつても社会にはたらきかけ得るという見方に至っていないため、そうした人間は社会や国家によって服従を強要される存在として、直ちに否定的に把握されることになる。この論考の翌年に書かれた「現代に於ける人間の危機」という論考は、「現代の危機は市民的社会の危機である」[清水 1934b=1947: 35]という前者とほぼ同じ書き出しではじまるが、「嘗ては自己の力への堅い信念を懐いていた人間が、自己の力以上の外部的な力のためにその足場を壊されなければならぬ運命を考えて如何にはかなく感じることであろうか」[*Ibid.*: 64]と、そこで描かれる人間像は前者よりさらに悲観的なものとなるのである。

「市民」に示される清水の当時の人間観は、社会と個人との対立を解消し得ないものと捉える限り、そして非合理的な人間への視角が欠けている限り、破綻とはいわないまでも、いずれ積極的な解釈ができなくなる性格のものであった。清水において、社会と個人とを「対立」ではなく「融合」として捉える見方の形成、そして非合理的な人間を社会的行為の主体として肯定的に想定し得るようになるためには、デューイおよびプラグマティズムの受容を待たなければならなかったのである。こうした清水の見方がどのように形成されたのかを、次に検討しなければならない。

### 3. 「日常の人間生活と日々の諸問題の解決への視線」の形成

清水がデューイおよびプラグマティズムに関心を寄せ、その思想を受容していった過程については、すでに整理したことがあるので〔庄司2010〕詳しくは繰り返さないが、清水がこれらの思想に魅かれた大きな理由は、第1に人間が環境に生きる無力な有機体のひとつとして捉えられていたこと、したがって第2に、そうした人間は常に環境との関係を構築しながら自己を形成しなければならない存在として捉えられていたことである。こうした人間の捉え方は、理性的で完結した存在として人間を把握しようとする、たとえばドイツ系統の社会学や哲学にはみられないものであった。デューイの生誕80年を記念して編まれた論文集の標題が、“*The Philosopher of the Common Man*”（1940年）と名付けられたことからもうかがえるように、デューイのプラグマティズムは普通の人、一般人を前提とするものであった。同書に序文を寄せた

シドニー・ラトナーは、デューイを「普通の人（the common man：引用者注）の人生や運命に関するあらゆる問題と提案された解決」にこそ関心があった哲学者といている〔Ratner 1940: 7-8〕。清水は、これを「庶民」「凡人」と訳しているが〔清水 1941=著作集6: 9〕、いずれにしても、抽象的にしか存在し得ないような特殊な人間像とは異なる、普通の人間を前提としているところにこそ、清水がデューイおよびプラグマティズムに魅力を感じたひとつのポイントがあったのである<sup>(4)</sup>。

では、清水はそうしたデューイおよびプラグマティズムから、どのように「日常の人間生活と日々の諸問題の解決への視線」という側面を形成していったのであろうか。このあたりの過程を、清水が自身の著作・論考で頻繁に参照しているデューイの業績から確認しておこう。

現実の問題への解決を提案するのではなく、昔からの知的な問題に固執するという意味で常に保守的であった哲学を批判し、「科学と社会的生活の現状下におけるそれらの諸問題の本質について課題を提起すること」〔Dewey 1917: 5-6,8〕を目的として書かれた「哲学復興の必要性」（“The Need for a Recovery of Philosophy”, 1917年）において、デューイは哲学が取り組む問題を「哲学者の問題」と「人びとの問題」の2つに区別し、哲学は前者ではなく後者を取り扱う装置となることで復活し得ると主張する〔*Ibid.*: 65〕。その上で、「哲学は、普通の人（the common man：引用者注）が自らの困難と苦闘する際の知性の上に負わされた重荷を取り除かなければならない」として、「人びとの問題」の問題解決に貢献すべき哲学の役割を、デューイは強調する〔*Ibid.*: 66〕。



また、「哲学上の諸問題における古いタイプと新しいタイプとの全般的な対立を示す」ことが目的であると序文で述べられた「哲学の再構成」(“Reconstruction in Philosophy”, 1920年)では、「将来の哲学の仕事が、その時代の社会的および道徳的な闘争について、人々の観念を明晰にすることにある」として、「哲学の目的は、人間に可能な限り、こうした闘争を処理する器官になることである」と述べられる[Dewey 1920 (清水訳 1968: 29)]。ここでいう「古いタイプ」がさきに挙げた「哲学復興の必要性」の「哲学者の問題」、 「新しいタイプ」が同じく「人びとの問題」にあたることは容易に分かるように、ここでもデューイは、人間の問題を解決することに哲学の目的を見出すのである。

同様の内容は、上記に続く『公衆とその諸問題』(“The Public and Its Problems”, 1927年)、「自由主義と社会的行動」(“Liberalism and Social Action”, 1935年)、「創造的民主主義」(“Creative Democracy”, 1940年)などにもみられ、普通の人びとの問題解決に目を向けることの重要性は、この頃のデューイの主張を一貫しているといえる。“The Philosopher of the Common Man”と題された論文集がデューイに献げられたのは、まさにこうした時期のことだったのである。

デューイに対して“The Philosopher of the Common Man”という名誉が献げられたことに対する清水の反応は早かった。翌1941年のはじめには「凡人の哲学」という論考を書いている。さきに少し触れたように、清水は「コモン・マンの哲学とは、(中略)庶民の哲学であり凡人の哲学であると言うことが出来よう」とした上で[清水 1941=著作集6:9]、その新し

さを、人間の希望や要求が認められないという諦めから自由である点に求めている[Ibid.: 10]。世界に対して希望や要求を披露する人間は、今や賢人のような完全な存在ではない。「それ(アメリカの哲学:引用者注)が前提する人間は、一切の悲しみや憤りから自由な賢人ではなく、或は喜び或は怒るコモン・マンである」[Ibid.: 10]。したがって、清水は、さきに挙げた「哲学復興の必要性」も援用しつつ、次のようにいうのである。

「普通の日常生活に没頭する人達が、その生活の底に於いて遭遇するところの問題、これを原理的に根本的に解く方法として哲学は生きなければならぬ」[Ibid.:11]

ここからは、清水が上で確認してきたようなデューイの考え方を「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」として受容していたことが分かる。上で引いた「凡人の哲学」は、清水における「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」の形成を示すひとつの証左であるが、これ以前に書かれた他の著作、論考からもその形成を確認することは可能である<sup>(5)</sup>。清水がデューイおよびプラグマティズムを受容した時期が1935年とみられることにはすでに触れておいたが、「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」は、この頃すでに形成されつつあったといえる。

ただ、ここでもうひとつ確認しておきたいのは、清水が「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」を形成する下地になったと思われるマルクス主義という背景についてである。

清水がマルクス主義に魅かれた理由には、清水自身が自伝などでたびたび振り返っていると

おり、主に青年期における生活の苦しさがあったものとみられる。したがって、清水がマルクス主義の立場から形式社会学の抽象性を批判した際の次のような言葉は、おそらく学説や理論における見解の相違を超えた、生活上の実感を伴うものであったと思われる。

「最早ここ（形式社会学：引用者注）では吾吾がその中で生活し、これに圧迫され、これと闘い、これを変革して行かねばならぬところの現実の強力な生きた社会は問題とならず、唯考えられた社会、思惟の中の社会が分析されるに過ぎない」[清水 1933a: 76]

ここでもやはり、人間が日々、生活する「生きた社会」の問題に取り組まなければならない社会学の役割が強く意識されている。この後段で清水は、この頃、流行した文化社会学について、「具体的な問題とその澁刺たる姿に於いて捕え、而も実践への指針として役立つかの如くに振舞う」ものと述べているが [Ibid.: 76-77]、そのイデオロギー性は別問題として、1930年代初頭の清水が、社会学が見失った日常の人間生活への視線というべき魅力をマルクス主義に感じていたことはたしかであろう<sup>(6)</sup>。

清水自身は後に、「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」というべき側面の自覚について、「アメリカ社会学との接触によって、人間の方向へ深入りした」という表現で振り返っているが [清水 1959=1970: 157]、ここで確認したように、その契機のひとつはおそらく、プラグマティズム受容以前のマルクス主義への関心のうちにも見出し得るものと思われる。

#### 4. 「社会対個人」から「社会と個人」へ

ここまでみてきたように、清水における「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」はデューイおよびプラグマティズムの影響のもとで形成されたと考えられるわけだが、ここで、もうひとつ考えなければならないのは、清水がプラグマティズムを受容して新たな思想の側面を形成したことによって、清水の社会・個人観にも顕著な変化が生じたということである。結論を先にいえば、社会と個人とを「対立」ではなく「融合」として捉える見方の形成である。

これが「日常の人間生活や日々の諸問題の解決への視線」の形成と関係するのは、日常の人間生活への視線を形成したことで、現実の生活は「社会」においてではなく、「集団」において営まれるという方向に清水の社会観が変化したためである。いわば、「社会—個人」から「社会—集団—個人」という、いわゆる「社会的集団論」の立場が、清水の社会・個人観として確立されるのである。

この前後で対照的な主張を挙げてみよう。

清水がデューイおよびプラグマティズムを受容する前に著した主要な社会学の著作のひとつである『社会と個人——社会学成立史——上巻』（1935年、以下『社会と個人』）では、次のような言葉がみえる。

「人間の書かれたる歴史が階級闘争の歴史であるとは縷々語られることであるが、右の見解は正に人間の歴史を以て社会と個人との間の闘争の歴史として把握するものでなければならず而もこの際両者の和解はついに期待出来ぬものとして語られておるのである」[清水 1935=著作集1: 292-293]

上にみた清水の主張を貫く社会・個人観を言い表すならば、それは「社会対個人」ということになるだろう。

一方、デューイおよびプラグマティズム受容後に目を転ずると、「自由主義の系譜」(1938年)における次のような言葉が象徴的である。

「人間は、環境との間に対立の関係を持つものであるよりは寧ろ環境との融合に於いてあるものと考えねばならぬ」[清水 1938= 著作集6: 106]

『社会と個人』で示された社会・個人観が大きく変化し、社会と個人との関係を「融合」において捉える、まさに「社会と個人」というべき社会・個人観が示されていることが分かる。

清水はこの後、『社会的人間論』(1940年)などでこうした見地を発展させ、「社会的集団論」の立場を明確に形成していくことになる。たとえば、清水は「人間は或る基礎的社会のうちに生れるのでなくして、その内部に存する特定の社会集団のうちに生れる」といい、その社会集団の系列を「家族集団—遊戯集団—隣人集団—学校集団—職業集団—基礎的社会」と整理している[清水 1940= 著作集 3: 23-25]。ここで清水がいう「基礎的社会」とは、要するに「国家」が想定されているのであるが、そこに至る過程にいくつもの「集団」が含まれている点に注意すべきである。清水が、「一つの基礎的社会に依って一様に作られるのであるよりも、そのうちに含まれる様々の集団に依って多様な方向に形成せられて行く」[Ibid.: 23]というとき、社会と個人とは直接に関係するのではなく、「集団」を媒介として関係するものとして捉えられているのであって、本稿の趣旨からいえば余談に属するが、ここに国家と個人とを直接に結び

つけ、国家によって個人が作られるという、当時、強く説かれた国家観に、一定程度、批判的な立場を示したともいえる。人間は「家族集団」に生まれ、成長に伴って「遊戯集団」や「学校集団」など様々な集団に関係していく。そこで描かれるのは、集団(国家とは限らない)によって作られていく人間の姿ではあるが、少なくとも対立という関係は考えられていないことがわかる。

戦前において形成されたこうした社会・個人観は、以後の清水の思想をほぼ通底する。戦後まもなくの講義録「社会学の話」に、「吾々が社会生活をしているということは、我々自身が社会の中にいることを示すものであるが、厳密に言えば、集団生活をしているといった方がぴったりする」[清水 1946a: 210]といった言葉がみえることも事例のひとつである。晩年近くに書かれた『「社交学」ノート』(1986年)でも様々な集団における人間について語られており、後年に至っても、社会と個人との関係を「融合」において捉える見方は保持されていたといえるのである。

## 5. デューイの明るさ、ジンメルの暗さ

ここまでの検討からうかがえることで重要なのは、デューイにおいて想定されている人間は、必ずしも非合理的な存在とは限らないことである。たとえば、清水が頻繁に参照しているデューイの論考「創造的民主主義」においても、人間は完全に理性のみによって行動するものとはいわないまでも、非合理的な力は合理的な「知性」(Intelligence)によって統御できるという前提にある[Dewey 1940: 224]。したがって、デューイの考えに、人間を非合理的存在と捉え



る見方が含意されていないわけではない<sup>(7)</sup>。しかしながら、別の場所で清水が、上記のようなデューイの前提を「真に18世紀的な前提」と批判し〔清水 1948=著作集 6:138〕、さらに次のように述べるとき、清水において、人間の合理性をめぐるデューイとの見解の相違は、明確に意識されていたといわなければならない。

「人間の合理性を前提とする民主主義の原則の下に於いても、このこと（人間の非合理的活動：引用者注）は、仮令緩和された形態にせよ、依然として生き続けるのである。（中略）歴史的な文脈の問題は、人間の非合理的要素が承認せられ、その政治に対する重要性が承認せられる時、不可避免的に新しい意味を帯びなければならない」〔*Ibid.*:172〕

では、清水における「人間の非合理性の肯定」という見方に対する、ある種のこだわりはどのように形成されたのであろうか。

このことに関連して、かつて安田武は、戦前と終戦間もない頃の清水の人間観を貫く特徴を、清水自身のいう「デューウィの明るさとジンメルの暗さ」という言葉を使って、次のように整理したことがある〔安田 1954:216〕。

「前者（デューイの明るさ：引用者注）はまた、この著者が古くから抱いていた人間理性への限りない信頼に通ずるものであり、後者（ジンメルの暗さ：引用者注）は前者と同時に、氏の胸深く根をおろした、非合理的な存在としての人間への認識（中略）と照応する」〔*Ibid.*:216〕

安田の指摘は、清水の人間観を考える上で重要である。というのは、清水における「人間の非合理性の肯定」という見方を考える際、ジンメルの影響を考慮にいれる必要を示唆するからである。

上でみてきたように、デューイのプラグマ

ティズムが示したのは、安田のいう「人間の理性への限りない信頼」にあたるものであった。清水自身、デューイによって導かれたアメリカ・プラグマティズムの特徴として、「人間性に対する非常な信頼」を挙げ、「人間というものはその根本において知的なものだ、知的なものになり得るという信念に基いている」と述べている〔清水 1947:47-48〕。

しかしながら、その一方で、さきに挙げたように、デューイの前提を「真に18世紀的な前提」と批判してもいるし、別の場所ではデューイのプラグマティズムについて「これは完全なオプティミズムである」とも述べている〔清水 1949=著作集 6:452〕。清水は、デューイおよびプラグマティズムが持つ、こうしたオプティミスティックな側面については、無条件に信仰することができなかったのである。上記に続けて「アメリカの生活であつたら、ある程度まで通用するであろう。併し私は、日本で、それも比類のない重量を持つ現実に押し潰されながら、同じ信仰に奮りついている」とも振り返ったように〔*Ibid.*:452〕、日本とアメリカの、あるいは清水とデューイの置かれた諸状況が全く異なっていたからである。

デューイおよびプラグマティズムを受容し、自身の思想の中心に据えていた清水が、しかしその持つオプティミスティックな側面には距離を置いていたという点は注目し値する。このことが、とくに終戦直後において、清水の民主主義論と他の民主主義論者との間に明確な一線を画する主たる要因となったためである。これについては後述するとして、いずれにしても清水の内部では、人間の合理性への信頼という明るさを放つデューイの思想と、「非合理的な人

間への認識」という暗さをたたえたジンメルの思想とが共存していた。では、清水が理解していたジンメル思想の暗さとは、何に由来するのであろうか。

1918年に亡くなったジンメルの最後の社会学的著作は、その前年の『社会学の根本問題—個人と社会』（“*Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*”, 1917年）である。副題からうかがえるように、ここでジンメルは社会と個人という社会学の基本的な問題意識に取り組んでいるのであって、晩年近いジンメルにとっての社会学の根本問題とは、なお社会と個人との矛盾の問題であったのである。

ジンメルと同じように、清水にとっても社会と個人との矛盾は根本的な問題意識であった。清水が1935年に『社会と個人』を著したとき、そのなかの1章をやはり「社会と個人」と題し、このジンメルの著作への言及からは始めている[清水 1935= 著作集1: 282]。

デューイおよびプラグマティズムを知る以前の清水は、歴史の発展は社会と個人との闘争の歴史であるという見方を採っていた。この頃の清水が社会と個人の関係を闘争という対立関係で捉えている点、および両者の共存という選択肢が想定されていなかった点については、すでに触れたとおりである。そもそも清水がこの本を書いたのは、あるいはジンメルの『社会学の根本問題』の影響を受けてのことではなかったかと振り返っているが[清水1959=1970: 136]、ジンメルが社会と個人との矛盾は、いずれ調和という方向に向かうことを期待したのに対し、清水の見解にそうした余地はない。社会か、個人か。さきに触れたように、1930年代初頭に魅かれていたマルクス主義の余韻を残すこうした

意識は、デューイおよびプラグマティズムを受容するまで、清水の社会・個人観の基調をなしていた。

こうした社会・個人観を持っていた清水のジンメル観として興味深いのは、この頃の清水の目に、ジンメルが社会あるいは国家の現実の問題を避けているかのように映ったと振り返っていることである[清水 1951= 著作集9: 172]。

清水も認めているように、ドイツ形式社会学は、一面で科学としての社会学の体裁を整えようとしたあまり、いわゆる「形式」という人間の心的相互作用の追求に過度に傾くきらいがあった。そうしたなかで、形式社会学の祖ともいえるジンメルが、人間の「微妙な心理の襞に分け入るという方法で様々な社会現象を取扱っている」ことに、清水は深く魅せられてもいたのである[Ibid.:172]。ジンメルは1908年の『社会学』（“*Soziologie*”）において、「形式」についての有名な一文を残すが<sup>(6)</sup>、後の『社会学の根本問題』で「社会と個人との間の闘争は個人の本質的部分間の闘争として個人自らの中に移される」[Simmel 1917（清水訳 1979: 94）]と述べたことと相俟って、清水にそれは「輪郭の明らかな集団を正面から認めることなく、取るに足らぬと見える微細な相互作用を追求する」ものとみえたのである[清水 1948= 著作集7: 106]。社会と個人との対立は、ジンメルにおいても直ちには解消され得ない。社会と個人ではなく、個人と個人との間の心的相互作用に道を見出そうとするジンメルは、清水にとって社会に対する「ベシミスティックな目」を持つものであった[清水 1948= 著作集7: 106]。19世紀末に形式社会学が生まれる前の社会学は、たとえばコントの総合社会学にみられるように、近

代化と社会の発展への深い信頼が横たわっていたと清水はみる [Ibid.: 108]。しかし、ジンメルの社会学はそうした一種の明るさとは無縁である。清水も、「人間と人間とを結ぶ微妙な相互作用の諸形式には、疑いもなく不安な暗い影が射している」と感じるのである [Ibid.: 106]。さきに1933年の「史的唯物論と社会学」における清水の形式社会学批判を引いたが、それもこうした清水の見解を反映したものと思われる。

だが、これを以って、清水がジンメルの社会学を否定し去ったというわけではない。1935年の『社会と個人』からまもなく、清水がデューイおよびプラグマティズムの思想を受容すると、こうしたジンメルの社会学は新たな魅力をもって現れることになる。ジンメルのいう「形式」、すなわち心的相互作用がジョージ・ハーバード・ミードらを経て、20世紀にいわゆる「シンボリック相互作用論」として現れたように、人間を「微妙な心理の襞に分け入る」かたちで捉える方法が、アメリカ社会心理学の方法と通じるものがあったためである。人間の心的相互作用から社会の「形式」に目を向けるとき、そこに浮かびあがるのは、まなざしを交わしたり、妬みあったり、昼食をともにしたり、着飾って装いをこらしたりする、いわば「コモン・マン」の姿であった。清水はデューイおよびプラグマティズムを受容することで、ジンメル社会学の新たな可能性を見出すに至るのである。

## 6. 『民主主義の哲学』へ

1945年の敗戦後、アメリカの占領政策のもとで、日本では民主主義思想の「紹介」がさかんに行われた。これを、すでに「大正デモクラ

シー」の時代に説かれた民主主義思想の復権とみるか、アメリカ式の新しい方法の導入とみるか、見解の相違はともかくとして、こうした動向が顕著にみられた終戦直後のある時期を、清水は後に「短い啓蒙時代」と振り返っている [清水 1956=1959: 15]。

言葉そのものは端的だが、ここには終戦直後の民主主義をめぐる清水のいくつかの思いが込められている。

第1に、清水にとってその時期は、かつての西洋における啓蒙主義の時代に擬せられるべきものであった。かつての啓蒙時代も、当初、信じられ、力強く説かれた人間の理性と思想の力の限界がやがて浮き彫りになるという顛末を辿ったが、終戦直後の日本も同じ道を辿ったと清水はみる。清水も論じた民主主義との関係でいえば、民主主義を支える人間に期待されるものとしてさかんに説かれた理性や合理性を、清水自身、間もなく重要視しなくなるのである。さきに触れたように、安田は清水の人間観には「デューイの明るさ」と「ジンメルの暗さ」の双方が深く根を下ろしていたと述べたが、上にみた顛末はつまり、デューイ的な明るさよりもジンメル的な暗さが顕在化してくる過程といえる。このことは、戦後の清水の民主主義観の変化として興味深いところである。

また、第2に、それは清水にとって「短い」ものであった。清水によればこの「啓蒙時代」は、「嘗て私が『匿名の思想』と名づけたものが、ほとんど無疵のまま、輸入された諸思想の霧の奥に残っていることに気づいた時に終わった」 [Ibid.: 15] という。上記のような清水の気づきは1946年にはすでにみられるから、清水のいう「短い啓蒙時代」とは、時間的には1945年

の敗戦から1946年にかけてのわずか1年あまりの期間ということになる。

久野収と鶴見俊輔は、玉音放送からわずか10日後の8月25日あたりからすでに、「アメリカ追従への思想的動き」がはじまりつつあることを、当時の新聞記事の内容から示しているが〔久野、鶴見 1956: 188〕、清水の周囲でも変化は急激であった。戦争が終わってからすぐ、清水は「急にチャホヤされるようになった」という。町の有力者、代議士、出版社などが挙って、清水に民主主義についての講演や原稿を依頼したからである〔清水1975=著作集14: 109〕。清水は著名な民主主義論者のひとりになりつつあったのである。

清水の『民主主義の哲学』（1946年）が著されたのは、このようなときである。これは、清水が戦前から終戦直後に書いた論考をまとめて編まれた、最初の論文集である。ここに収められた7本の論考のうち、「デューウィの宗教論」と「デモクラシーの哲学」とは、終戦直後の1945年11月に発表されたものである。

前者「デューウィの宗教論」は、デューイの『共同の信仰』（“*A Common Faith*”, 1934年）をベースとして、敗戦によって国家的宗教から解放せられた国民が、却って「宗教的無関心」の状態にあることを批判的に論じたものである。

同書においてデューイは、「宗教」(a religion)と「宗教的なもの」(the religious)とを区別して、後者を前者の重荷から救い出そうとする〔Dewey 1934 (河村訳 2002: 184)〕。「宗教的なもの」はデューイにおいて、「制度的なものであれ、信念の体系としてであれ、特別な実態について何も意味しない」〔*Ibid.*: 184〕ことを指す。こうしたデューイの議論から清水

は、次のようにいう。

「デューウィによれば、それ（宗教的なもの：引用者注）は如何なる客体に対しても、また如何なる理想或は目的に対しても取られ得る一つの態度であるに過ぎない。（中略）宗教的であるためには、決して特定の制度的な宗教に自己を結びつける必要はない」〔清水 1946b=著作集6: 57, 60〕

いうまでもなく、清水がここでデューイにみているのは単なる宗教論ではない。清水がデューイの宗教論を上記のように捉えるとき、その視線の先にみえていたのは、アメリカにおける宗教的態度からみた生活への態度である。清水は上記に続けて次のようにいう。

「宗教的なものは禁欲や瞑想と共にあるのではない。反対に、理想を信じ、障害を突破して進む、謂わば極めてアメリカ的な生活の態度のうちに求められるのである」〔*Ibid.*: 60〕

終戦による宗教的解放がみられるなか、清水の目には日本人がむしろ、文学や風流、わび・さびの世界へ逃避しつつあるように映った。それは生活を維持し、向上させるのに適当な道ではない。清水はデューイの宗教論をベースとして、終戦直後の混乱、無気力な現実のなかで、むしろ積極的に生活と社会の向上を図る道を説くのである。

これとほぼ同じ時期に発表した「デモクラシーの哲学」も、「デューウィの宗教論」と基本的な議論の方向性は同じである。

「デューウィの宗教論」では、終戦による宗教的自由がむしろ、非建設的な方向へ人びとの関心を寄せていることを批判的に捉えていたが、この「デモクラシーの哲学」では、終戦による混乱が、却って文学や哲学など人間精神の

内面へ向かいがちな点が批判されている。清水がいう「決して行動に発展せぬ積極的精神」[*Ibid.*: 79] は実際の生活における困難の何ものも解決しない。こうした精神に浸る態度は、いわばデューイが「哲学復興の必要性」において峻別した「哲学者の問題」に耽溺するものであり、清水はそうではなくて、あくまで取り組むべきは「人びとの問題」であることを主張するのである。清水はここでも、“*The Philosopher of the Common Man*” に触れながら、次のようにいう。

「コモン・マンの問題をコモン・マンのために解くということになれば、哲学そのものの構造もこれに応じて変化することを要求される。日本の哲学の如きは到底この任務に耐え得ないであろう。『哲学者の問題』と『多くの人々の問題』との対立は、日本の哲学者にして若干の良心があるならば当然真面目に反省せねばならぬものである」[*Ibid.*: 85-86]

以上からうかがえるように、戦後、清水がいわゆる民主主義論者のひとりに位置付けられた背景には、デューイおよびプラグマティズムの受容によって形成された、「日常の人間生活と日々の諸問題の解決への視線」および「人間の非合理性の肯定」という側面の影響が明確である。しかしながら、清水におけるこうした志向は1945年の敗戦を機に顕在化したものではない。これまで考察してきたとおり、清水における「日常の人間生活と日々の諸問題の解決への視線」および「人間の非合理性の肯定」という側面の形成は戦前においてすでになされ、戦後への道すじとしてひらかれていたものだったのである。

## 結び

以上、戦前から戦後まもない時期に限って、清水における人間観およびそれと関わる社会観の変遷を考察してきた。

ところで、上記のような清水の人間観および社会観は、時間の経過とともに次第に変化がみられていくことにも付言しておく必要がある。というのは、さきに触れた、清水のいう「短い啓蒙時代」が終わりを告げるためである。

これは、いわば「デューイの明るさ」から「ジンメルの暗さ」への比重の変化であるが、このことは「短い啓蒙時代」が終わった後の1947年頃から清水が発表する、「新しい啓蒙」「ヒューマニズムの前提」「反社会的集団」（いずれも1947年）から「匿名の思想」（1948年）、「暗殺」（1949年）、そして「庶民」（1950年）などに続く道のりから明らかである。この過程において、清水の思想から人間を合理的存在とみる立場はほぼ姿を消していく。本稿で議論した時間的範囲を越えたあと、清水の思想においては、デューイのプラグマティズムにみられる「明るさ」が後退し、「人間の非合理性の肯定」という側面が顕在化していくことになるのである。

ただし、注意しておく必要があると思われるのは、清水における「人間の非合理性の肯定」は、人間理性の単純な否定に必ずしも直結しないという可能性である。言い換えれば、筆者が以前、「現実関与の論理」という言葉で示した清水の思想のひとつの特徴である、歴史や社会における人間の主体的な役割の否定にまでつながるものではないと思われる。この問題には、戦後の清水の思想的生涯において接近が図られた、多くの思想家の思想との関連で清水の思想



を検討することから、おそらく接近することができるものと思われる。

〔投稿受理日 2010.11.20／掲載決定日 2011.1.27〕

#### 注

- (1) 戦前に書かれた清水評は多くない。清水の『人間の世界』（1937年）に寄せた戸坂潤（1900-45）の書評〔戸坂 1937=1967: 398-399〕は、この時期に清水の言論に目を向けた数少ない例とみられる。戦後になると、後掲の〔服部 1950〕や〔南 1951〕、また〔日高 1954〕、〔安田 1954〕など、それに類する評価はかなり多くなる。
- (2) 小熊の場合、前年の『＜民主＞と＜愛国＞』の注で清水の市民社会観について触れ、それをいわゆる「市民社会青年」の思考の範疇に含めて評価しようとした過去の手法を批判した〔小熊 2002: 830-831〕。しかしながら、この著書の「外伝というべき性格のもの」と位置付けた2003年の『清水幾太郎』においても、小熊は独自の清水像を提示するには至っておらず、むしろ清水の庶民性をその出自に求める従来型の手法にとどまっている。
- (3) もちろん、こうした見方は清水に特有なものではない。同じ時期、たとえば高島善哉は『経済社会学の根本問題』（1941年）において、また大河内一男は『スミスとリスト』（1943年）において、それぞれの「市民社会的性格」を経済学的側面から析出している。
- (4) なお、清水がプラグマティズムの思想を受容した時期は1935年のことと思われる。この点についても〔庄司 2010〕で検討している。
- (5) たとえば「理想の再顕現」「袖師の海」（共に1939年）や「国民文化の構造」（1940年）では、思想の役割は、「東亜協同体論」のような高邁な理想を説くだけでなく、「日常の卑小な問題の末に至るまで残りなく解かれる如きものでなければならぬ」〔清水 1939=著作集4: 284〕などと説かれている。
- (6) ただし、この頃の清水にとって文化社会学は、マルクス主義の立場から批判されるべきものとして取り上げられていることに注意が必要である。しかしながら、ここで引いたように、文化社会学が人間の日常生活への視線を保持していることにも言及している点で、その批判は単なるイデオロギー批判以上の意義を有していると考えられる。

この頃の清水の社会学については、秋元律郎に優れた研究がある〔秋元 1979〕。

- (7) もちろん、この点については様々な見解がある。たとえば、デューイの人間観に非合理的側面を見出す見解としては〔Lewis and Smith 1980〕や〔Murphy 1981〕などがある。
- (8) 「人びとがたがいにまなざしを交わしあい、相互に妬みあい、たがいに手紙を書き交わしたり、あるいは昼食を共にし、（中略）ある者が他者に道を尋ねたり、あるいはたがいに着飾って装いをこらしめたりすること、（中略）このような関係はすべて人から人へと演じられ、瞬間的であろうと永続的であろうと、意識されていようと意識されないままであろうと、また一時的であろうと影響の多いものでであろうと、われわれを絶えまなく一緒に結びつける」〔Simmel 1908（居安訳 1994: 29-30）〕。

#### 参考文献

清水の主要著作・論考等は、以下の著作集に収められている。

清水禮子編、1992-93、『清水幾太郎著作集』、講談社。

本稿で取り上げた清水の著作・論考のうち、上記著作集に収められているものについては著作集から引用し、〔初出=著作集の巻号: ページ数〕のように記載した。利用した著作・論考名は以下の一覧に記載している。なお、引用にあたって旧字・旧仮名遣等は改めている。上記著作集に収められていない清水の著作・論考等については、所定の引用規則にしたがった。

秋元律郎、1979、『日本社会学史一形成過程と思想構造』、早稲田大学出版部。

Dewey, John., 1917, *The Need for a Recovery of Philosophy: Essays in the Pragmatic Attitude.*, New York, Henry and Company.

———, 1920, "Reconstruction in Philosophy", Edited by Jo Ann Boydston, 1982, *John Dewey The Middle Works: 1899-1924*, vol.12, Carbondale, Southern Illinois University Press, 清水幾太郎・清水禮子訳、1968、『哲学の改造』、岩波書店。

———, 1934, *A Common Faith.*, Edited by Jo Ann Boydston, 1986, *John Dewey The Later Works: 1925-1953*, vol.9, Carbondale, Southern Illinois University Press, ,

- 河村望記, 2002, 『自由と文化・共同の信仰』, 人間の科学社, 175-249.
- , 1935, “Liberalism and Social Action” ,
- Edited by Jo Ann Boydston, 1987, *John Dewey The Later Works: 1925-1953*, vol.11, Carbondale, Southern Illinois University Press, 河村望記, 2002, 『自由と文化・共同の信仰』, 人間の科学社, 251-334.
- , 1940, “Creative Democracy” , *The Philosopher of the Common Man: Essays in Honor of John Dewey to Celebrate his Eightieth Birthday*, New York, Greenwood Press.
- 服部之経, 1950, 「清水幾太郎論—庶民への郷愁」(『中央公論』1950年8月号, 中央公論社, 130-137).
- 日高六郎, 1954, 清水幾太郎『社会学ノート』の解説(『社会学ノート』, 河出書房, 1954, 171-174)
- 久野収, 鶴見俊輔, 1956, 『現代日本の思想—その五つの渦』, 岩波書店.
- Lewis, J. D. and Smith, R.L., 1980, *American Sociology and Pragmatism*, Chicago, University of Chicago Press.
- Murphy, John P., 1981, *Pragmatism: From Piece to Davidson*, Oxford, Westview Press.
- 南博, 1951, 「庶民の思想家—『私の社会観』と清水さん」(『創元』1951年4月号, 創元社(『現代随想全集 第13巻』, 創元社, 1954の付録に再録).
- 小熊英二, 2002, 『<民主>と<愛国>—戦後日本のナショナリズムと公共性』, 新曜社.
- , 2003, 『清水幾太郎—ある戦後知識人の軌跡』, 御茶の水書房.
- 大久保孝治, 2007, 「清水幾太郎における『庶民』のゆくえ」(早稲田社会学会『社会学年誌』第48号, 103-126).
- Ratner, Sidney., 1940, Foreword, *The Philosopher of the Common Man: Essays in Honor of John Dewey to Celebrate his Eightieth Birthday*, New York, Greenwood Press.
- 清水幾太郎, 1933a, 「史的唯物論と社会学(大森氏は社会学を如何に遇するか)」(唯物論研究会『唯物論研究』第6号, 57-86).
- , 1933b, 「現代の危機と理論の実践性」(『社会学ノート』, 銀座出版社, 1947, 1-31).
- , 1934a, 「社会学の悲劇」(『中央公論』1934年3月号, 中央公論社, 58-70).
- , 1934b, 「現代に於ける人間の危機」(『社会学ノート』, 銀座出版社, 1947, 33-67).
- , 1935, 『社会と個人——社会学成立史——上巻』(『清水幾太郎著作集』第1巻, 239-514).
- , 1938, 「自由主義の系譜」(『清水幾太郎著作集』第6巻, 102-135).
- , 1939, 「理想の再顕現」(『清水幾太郎著作集』第4巻, 281-286).
- , 1940, 『社会的人間論』(『清水幾太郎著作集』第3巻, 11-108).
- , 1941, 「凡人の哲学」(『清水幾太郎著作集』第6巻, 9 -15).
- , 1946a, 「社会学の話」(『社会的人間論』附録, 五元書庫, 1946, 173-224).
- , 1946b, 『民主主義の哲学』(『清水幾太郎著作集』第6巻, 3 -135).
- , 1947, 「プラグマティズム概論」(清水幾太郎, 久野収, 1947, 『プラグマティズム I 概論・論理学』, 白晝書院, 1 -49).
- , 1948, 『社会学講義』(『清水幾太郎著作集』第7巻).
- , 1949, 『私の読書と人生』(『清水幾太郎著作集』第6巻, 359-483).
- , 1951, 『社会心理学』(『清水幾太郎著作集』第9巻, 3-181).
- , 1956, 「現代の思想と歴史」(『現代思想入門』, 岩波書店, 1959, 1 -44).
- , 1959, 『社会学入門』, 光文社(のち, 潮出版社, 1970).
- , 1975, 『わが人生の断片』(『清水幾太郎著作集』第14巻).
- 篠原敏昭, 2004, 「清水幾太郎における市民主義と国家主義の問題」(村上俊介ほか編, 2004, 『市民社会とアソシエーション』, 社会評論社, 191-215).
- 庄司武史, 2010, 「清水幾太郎における『現実関与の論理』の形成」(早稲田大学大学院社会科学研究所『社学研論集』第15号, 15-29).
- Simmel, Georg., 1908, *Soziologie: Unter suchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Berlin, Duncker & Humblot, 居安正訳, 1994, 『社会学(上巻)』, 白水社.
- , 1917, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, Sammlung Goschen, Berlin, Walter de Gruyter, 清水幾太郎訳, 1979, 『社会学の根本問題』, 岩波書店.
- 戸坂潤, 1937, 「清水幾太郎著『人間の世界』」(書評)(『戸坂潤全集』第5巻, 勁草書房, 1967, 398-

399).

鶴見俊輔, 1960, 「翼賛運動の学問論—杉靖三郎・清水幾太郎・大熊信行」(思想の科学研究会『改訂増補 共同研究 転向 中』, 平凡社, 152-200).

安田武, 1954, 清水幾太郎『私の社会観』の解説(『私の社会観』, 角川書店, 1954, 210-221)

———, 1964, 「清水幾太郎論」(思想の科学研究会『思想の科学』1964年11月号, 10-18).

———, 1965, 「清水幾太郎論—一つの『平和論』の破綻」(『人間の再建—戦中派 その罪責と矜持』, 筑摩書房, 1969, 113-147).